運命の輪

ながた かずひさ

【序】

原罪とは想像力のことである。
想像力はむろん創造力であり、これさえ無ければ人は楽園を追われることはなかった。

しかし、飛んでしまった以上、もう飛び続けるしかない。
その持続可能性を確保するには。
飛ぶことそのものを目的化する以外無い。

「生きる」とは本来、生きることそのものが目的である。

人は惑う。だから学ぶ。そして自分を変えてゆく。変わればまた惑う。この輪が回る季節を「青春」と呼ぶ。

若きうちは回る。年を取れば回す。この輪が回せなくなった時、運命は静かに止む。

【原罪】

「……はあ。……想像力？　へー……」
「わかってないだろ」
「うん？　ううん？　うん？」
「いや、まあ、いいさ。俺の妄想だ。忘れてくれ」

倫理の授業でキリスト教の「原罪」について教わった。先生の説明は要領を得ないので、ウィキを引いた。要領を得ない。「解釈はいろいろある」とかある。な

にそれ。
こういう時はポンちゃんだ。要らないことだけ知っている。
ちょうど生徒会のプリント折りがあったので、手伝えと誘った。

「面食らっただけ。説明、してくれると嬉しい」
「説明か。できるかどうかわからんが」

と、

『原罪？　想像力さ』

という予想もしない答えが返って来た。さすが美術部、鬼面人を驚かすことばかり考えている。

「……人間を他の動物と分けるもの、を考えると、『メタ認知』に行き着く。だから『宗教』というものが人間の行動をよりよきように律するものだと仮定するなら、いの一番に指摘して釘を刺すのはここだと思うんだ。そもそも『神』という存在そのものがメタ認知そのものと言っていい」

「ちょっ、ちょっ、アクセル踏みすぎ」

「どこか難しいところがありましたか」

しれっ、とこう下まぶた越しにこっちを見るバカ。くそっ。

「冗談だよ。メタ認知というのは本来の語意より大雑把に、『自分を見てる自分』ぐらいで」

「それってホモ・サピエンスに特有なの？」

「知らん。というかわからん。ただ、実験ではチンパンジーでも『犬を見てるわたしをあなたが見ている』という認識はできないらしい。これ人間の赤ちゃんでもできるんだ。犬を指して母親を見て『ワンワン、ワ

ンワン』という」
「ふむ？」
「つまり、動物は他者がどう世界を見ているか興味が無いんだ。
ということは、自分の世界を表現して伝える必要もない。
ということは、想像力は少なくて済む。『あ、この棒で突いたらあのバナナに届くな』ぐらいで十分」
「ははあ」
「別の角度から言えば、アダムは知恵の実食べて『うわっ、オレ裸じゃん！　恥ずかし～』と思ったわけだ

ろ。それってモロに想像力であり、メタ認知じゃん。他人はオレをどう見てるか、っていう」
「そうね。じゃなぜ神様はその力を封じてたんだろう……ってああ、そうか」
「そりゃ人がどう思ってるか気にしなきゃ、そんな幸せなことはない」
「想像力の方は？」
「想像力は不安の源だぜ。明日どうなるんだろう将来どうなるんだろうって想像できるから、人は悩む」
「悩まないようにしてくれてたのに、どうして悩むようになったのかな」

「そりゃあんた、悩めば、神様を必要とするだろ？」
「ん？　うん？　えっ、だって」
「本当に禁じるなら知恵の実なんかその辺に成らさなきゃいいだろ。出来レースだよ出来レース。蛇もサクラ」
「またそういう言い方するー」
「人間が持つ力のうち最強のもの、それはつまりもちろん諸刃の剣となり、不安と名を変えて自分をも襲うもの、それこそが『想像力』だ、と昔の人は知ってたんだよ。
猫が呑気そうに寝てるのを見て、奴らには悩みが無

い代わりに、食い物を蓄える壺を用意する力も無い、とも」
「来年の収穫とか気になるもんね」
「俺には文化人類学かなんかの素養は無いんで、どのあたりで『神』という概念が生じたのかは知らない。でも、『大いなる自然に対する畏れ』がいつかの時点でわかりやすく人格神になったんじゃないかな。
ただその『畏れ』という感情というか感覚の時点で、それはつまり目で見てるもの以外の『大いなる存在』を想像力で勝手に描いているわけだから、基本的に神様と同じさ」

「えっ、ていうことはつまり……
想像力が、神様？」
「神様が想像力とも言える。人間の持つ力と悲しみの源泉、それが想像力。だから原罪とは想像力」
「うーなんかゴッチャになってきた」
「ゴッチャなんだよ。全部一緒。つまり『自分を見てる自分』っていうメタ認知能力＝想像力の一部＝神様＝原罪。ＯＫ？」
「……いやー……それってそんなのがそんな大きなものだとは思ってなかったからいまパッと受け入れ難い」

「俺だってそうだよ。この流れに気づくまでに人生をほとんど費やした」
「おおげさだね」
「いや、わりとマジで」
「……くすっ。でもポンちゃんらしいよ」
「らしいか？」
「こんな変なこと、こんなに考えてる人他に居ませんよ」
「だっておかしくないか、なんだよ『原罪』って、とか思わなかったか？　いや思ったんだよな。思ったよな」

「うん思った」
「そんな『人は生まれ持ってアダムの犯した罪を償う』とかバカにすんなよって感じですよ。知らないよそんなヤツ」
「ふふっ、そうだね」
「絶対解釈間違ってる。で、考えたのが今の流れ」
「西方教会二〇〇〇年の歴史に楯突こうっていうのが凄いですよ」
「バカにしてるなー」
「いいえー」
「間違ってるもんは間違ってるんだ。選択もしてない

ことに責任負わされてたまるか。いや間違い、人間が進んだ道を無理矢理『選択』と名付けて、勝手に失敗成功を評価づけて罪悪感、罪の意識を生み出して自分たちの存在価値を高めるな、っつーの」

理屈っぽいなあ……

この人たぶん芸術家には向いてないんだよね。言うときっと寂しそうな顔するから言わないけど。

「……でも、ポンちゃんのその見方だと、神様はまたせっかくの想像力を縛るわけだよね。教義とか、戒律

とか。どうして？　想像力が神様なら、神様そのものの力を弱めない？」
「だから神様はガン、というのが失礼ならウィルスなんだよ。強まりすぎると、宿主を殺す」
「雷落ちてくるわよ」
「だから言ってるだろ、俺と君がそういう神様を想像しなきゃ雷なんか落ちてこない」
「想像しちゃうわよ。わたしこう見えても信心深いんだから」
「どのぐらい？」
「毎日お仏壇にご飯をお供えするのはわたしの役目」

「うわ信心深っ。……仏様は落とさないだろ。こう、阿弥陀様はみんな救ってくれるらしいし」
「ウチは真宗じゃなくてえーっとね……」
「うわ信心深っ」
「いやちょっと待ってホントド忘れ。えーっと……」
「お参りっていうのは自分の想像力を宥めてるんだよ。お参りしたから、神様や仏様のご機嫌がいい、と自分で思える、から心が平安。それだけのこと」
「曹洞宗！」
「聞いてる？　禅か」
「怖い人だよね。福井の。誰だっけ」

「永平寺な。『正法眼蔵』」
「誰だっけ」
「使い切れない大きな力を持つとそれに振り回されるのは世の常人のならい。だからそれを外的に制御する必要があるのさ。誰でもがそんな力を使いこなせるわけじゃないから」
「でも想像力がないと社会が沈滞しちゃうじゃない」
「だから宗教のタガが強すぎた中世はどこでも沈滞してたんでしょうが。だからといって想像力いくらでも発揮できる現代はまたこれいろんな弊害が起きてるなあ」

「……使いこなせてないよね、想像力」
「ないね」
「だからといって戻れないよね」
「戻れないね。ナウシカが言うのさ漫画版で。『我々は血を吐きながら、繰り返し繰り返し、その朝を越えて飛ぶ鳥だ』と。
　想像力を自発的に駆使すること、言い換えれば『進化への意志』これこそが人間が人間たるゆえん。動物と人間を分けるポイントだ。それをなくした瞬間、人は人間で無くなる」

「血を吐くぐらいなら、檻に入って檻の中で羽ばたいてる方がいいって人、多そうだね」
「お、ぱるっぺにしては詩的な表現」
「そう考えると、昔の人って、偉かったんだねえ」
「その、今の人間のほうが優れているって考え方そのものがダーウィンだかなんだかに騙されてんだ。昔の人でも偉い人は偉い。今の人でもアホはアホ。しかしま、旧約聖書のこの『原罪』イメージ描いた人は、ものごとをよくわかっているな」
「ぷっ」

旧約聖書に上から目線の人はなかなか居ませんよ。ここに居るけど。

「……じゃポンちゃんが妙ちきりんな抽象画を描いたり変なインスタレーションをでっち上げてるのも、野獣のような溢れる想像力を飼い馴らしてるってわけかな？」

「まあ、そう、なのかもしれん。ただまあ、想像力、やっぱり全然無いよりは少しはあった方がいいと思う」

「そりゃそうだよね。つまり、人間の証なんだから」

「そう。……変なこと言いついでに言っちまうと、俺はこの想像力の使い方の一つ、『メタ認知』こそが人類を救うと思ってる」
「はあ！　人類を！　また話が大きくなったねー」
「人間の認識システムには二つあってさ」
「はあ」

ポンちゃんは自分自身で考えをまとめるように目を逸らして言う。
「科学と悟りなんだ。

合理と神秘と言ってもいい。
この二つの認識システム間の齟齬、これが人類がこの二〇〇〇年抱え続けてきた大問題で、ここをうまく整理しないと次の二〇〇〇年は闘えないと思うんだよ」
「？　科学と悟り？」
「そうそう。物事を要素に分解してお互いの関係を式に記述していけば、いずれ世界は全て理解できる、という物の考え方」
「そっちが科学」
「と、ある一瞬にすべてが体得できるような、そうい

う認識の方法。例、自転車の乗り方」
「自転車？」
「説明できないだろどうやって乗ってるか」
「えっ、それは……あれ。そういえば」
「でも乗れるだろ。
飛行機どうやって飛んでるのかとか麻酔どうやって効いてるのかとか、人類には知らんのに使ってる知恵や技術がいくらでもある」
「えっ。飛行機ってどうやって飛んでるかわかってないの」
「わかってない。仮説はいくつかあるけど」

「怖いじゃない！」
「怖いんだよ。悟りという言葉がうさんくさけりゃ、神秘でもいい。『わからないけど出現する』という認知がある。アイデアとか閃きって、全部そうじゃん。科学すなわち計算の、外のところから飛んでくるから、突然価値が生まれるのであって」
「はー。そうね」
「ところが人間はこの二つをうまく使いこなせず、よくコンフリクト……衝突させてしまう」
「使いこなすもなにも、そもそもその二つがあるなんて普段意識してないよ」

「そう。特に近代は科学がうまく行きすぎたんで、みんなわざと悟りを『無いもの』にしてるんだ。
熟達のトレーラードライバーは二〇メートルに及ぶ車体をバックで倉庫のヘリ三センチに寄せるんだ。それってなんの感覚だ？　視覚でも聴覚でも触覚でもないだろ？　強いて言えば自分自身の意識をトレーラーのサイズにまで合わせてしまうような神秘的な能力だ。説明がつかないから、完全に無視する」
「それどころか積極的に否定するよね、人魂とか、ＵＦＯとか、心霊写真とか」
「そのくせ正月に初詣行って仏壇神棚拝んで四十九日

に三回忌だ。否定するなら全否定すればいいものを。代償行為だよ。ふだん無視してる心の引っ掛かりが、そういうイベントで癒されるんだ」

「うーん……わたし割と好きだから」

「あ、だったな。まともかく、『そっちを見ない』という自己欺瞞が社会に満ちているが、『ある』のは『ある』のでそこの歪みが生じる。

歪みは必ずどこかで噴出する。

だから、合理的に物事を運ばなければならない時に神秘的な文言が挟み込まれ、逆に感情や感覚の部分にズケズケと思考や論理が踏み込んでくる」

「たとえば？」
「法と現実が合わない時に、現実に法を合わせようとしたり、法を無かったことにしたり、現実を歪めて認識して法に合っていると思い込もうとしたり」
「まだ抽象的」
「自衛隊とかどう？」
「あー……なるほど」
「無くすか、憲法を変えるか、どっちかなんだよ本来は。その時、『現実にあるんだから法を変えろ』というのは、方向が逆」
「そうだね。まさにそのぶつかりあってるところ」

「この手の『二つの認識齟齬』はそこら中にある。個人の生活にも常に立ち現れるし、重大な社会問題あるところ、必ずありと言っても過言ではない。

いや逆かもしれない、認識齟齬こそが、熟議や対話を不可能にし、社会問題を生む」

「ふむ」

「問題を解決しようとすれば、合理的に納得できる方策を利害関係者が集まって熟議すれば、本来はジリジリ解決に向かうはずなんだ。それがその、合理と神秘のぶつかり合いみたいなところに巻き込まれて、ぐしゃぐしゃっとなる」

「巻き込まれるっていうか」
「巻き込むというか。つまりほとんどの人が、そこんところの区別がついてないんよ。だから議論がすれ違う。違うレイヤー、階層の話をしてて話がまとまるはずないじゃん。自衛隊の例で言えば
『安全保障を取るか、平和憲法を取るか』
みたいなことを、いいオトナが平気で言う。こんなもの前者と後者で問題のレイヤーが全く違うので、これが対立しているという図式そのものがおかしい。両者を満たす解もあるだろうし、両者とも満たさない解もある」

「にゃーるほど」
「で！　だ！　つまり『メタ認知』が人類を救う、というのはそういうことで、おたがいが『いま自分はどちらに根拠を置いてどういう認識をしているか』を把握できていれば、少なくとも合理と神秘のレイヤーすれ違いの議論にはならない。
　身も蓋もない言い方をすれば、合理的な解に落とし込める条件闘争か、感情的な殴り合いによる決着か、なにかがつくわけですよ」
「でも結局、殴り合いなのね」
「そりゃ最後はそうですよ。ボクは親鸞キミは道元、

結婚したらどっちか捨てなきゃいかんでしょう」
「するの？」
「したら！　もう、変な想像させないで！」
「こっ、こっちの……いや、捨てなくてもおたがいの信仰を尊重して」
「墓どうすんの墓。形違うよ多分」
「じゃ最近型のこう無宗教のユニット墓地みたいなところへ……」
「それぐらいだったらもう散骨がいいな」
「んー……わたしやっぱりお墓は欲しいな……」
「女の子だねえ」

「女だからか？　いやあのね？　……あ、でもなんかスッキリ殴り合えるね」
「だろ？　わかってもらえて嬉しいよ。そこで、いや『親鸞の方が素晴らしい』とか『道元の方が偉い』とか言い出すから、ムチャクチャになるのよ。問題はそこじゃない」
「議論すべき点がすれ違ってるのね？」
「そう。それどころか状況は最近もっと悪くなってる。多くの人がなんとなく、なんだけどその『科学』って実は思ってたほど強力じゃないんじゃないか、限定的じゃないか、穴だらけじゃないか、と気づき始め

た」
「じゃなきゃスピリチュアルだのパワースポットだのって、流行らないもんね」
「うん。ただ多くの人が自分の中でもさっき言ったように整理できてないんだよ。初詣行くくせにＡＢＯ式血液型占いを叩く」
「ははあ」
「都合のいいところだけ『科学』の、つまり原因と結果が一対一で対応してる決定論的世界観が欲しいんだ。いい例が医療」
「お医者さん？」

「ピロリが居なくても胃潰瘍になるし、ヘルニアがあっても腰痛にならない人も居る。だけど、それとこれとが一対一対応してて、『薬や手術で原因を取り除いたからもう安心』というデカルト的世界であって欲しいんだよ。だから、『その腰痛は心因性かもしれませんねえ』と指摘すると狂ったように激昂する」
「あわかったつまりそうすると手術じゃ治らないかもしれない、って不安が生じるのね」
「その通り。そのくせ、地鎮祭やって七五三参りして厄年にお祓い。なんだよそれ。つまり守っているものは腰でも医学でも常識でもない、自分の中の『安心』

なんだ。それもなんの根拠も無い」
「自分の世界が崩れそうな時ほど、人間必死になるもんだよ。ダンナの浮気を告げ口された奥さんみたいな」
「ああーいい例え。みんなビビってんだよ。科学が穴だらけってことを認めたら、その穴は暗い地獄だとでも思ってる。違うって、そこを埋める明かりもあるんだ、バキボキッて一瞬で腰痛を直す民間療法の人も居る。そこうまく、使えるもの使えばいいだけなのに、なんかもうお城は全部石でできてなきゃダメ！みたいな」

「あるいは真逆で、そういうのにすがりついて本来できる手術もしないとか」
「輸血しない宗派とかな」
「中世にそういうものが猛威を奮い過ぎて、人類のトラウマになってるのかも」
「そうかもしれん。といっても、どちらからも逃げられないんだから、なんでうまいこと折り合いをつける、というあたりまえのことができないのかな、と」
「人間は……依って立つ確固たる『何か』が欲しいんだよ」
「そりゃわかる。だけどそれは生きるためだ。そのた

めに殺されたらなんの意味があるんだ」
人には絶対見せない険しい顔。正義のヒーローは時に冷酷。
「……だいたいわかった。でもわたしちょっと思ったのが」
「うむ」
「そのメタ認知力って、人による気がする。ファッションセンスと同じで、強く持ってる人から、からっきし無い人まで居ると思う」

「……む。しかし想像力ぐらいみんな持ってるだろ。じゃなきゃそんな神話が受け入れられるわけでもなし」
「想像力はね。でもそれをこの用途に使える・使いたいとは、限らない」
「ムムム。ムー……そこは教育その他であるレベルまで鍛えて……いや、それは難しいか。色のセンスとか、もう天性だからな。まあある程度はセオリーあるけど。ムーン……」
「さらに思うのがインセンティブ、もっと言えばメリットが無いのよ。そういう物の見方をすることに対す

る」
「いや、それは物事を根本的に解決する視点が」
「でも具体的な解決法はお医者さんへ行くか、お祈りをするかの二択だよね？」
「同じ行動を取るにしたって覚悟が違うじゃないか」
「覚悟。んー……」
「人間なんか極端に言えば納得するために生きてるんだ。ある行動の結果が第三者的に見て成功だろうと失敗だろうと本人が納得すればそれは成功だ」
「いやぁ……そーかなー……そんなこと言い出したら判断を全部外に放り出してしまうことだって、本人が

納得してればいい、ってことになるよね」
「うん。いいよ。殺されるけどな」
「またそうやって人を信じない」
「信じられる人間だけ信じないと、信じてる人間にまで迷惑かけるぞ」
「うーん……」

そこのところが、わたしとこの人はちょっと違うのかもしれない。
「でもツカサくん……」

「なに」
「えらいこと考えてるんだね」
そこは真面目に感心した。
「考えたくて考えてるわけじゃないさ。ただ、なんかどうにも俺には世の中が気持ち悪くて気持ち悪くて、なんでこんなに気持ち悪いんだ、憂鬱なんだ、わけがわからないんだ、と掘って掘って掘っていったら、こんなところに辿り着いた」
「苦労したんだ」

「まあね。
わけがわからないはずなんかないんだ。わけがわかるだろうところはいずれわけがわかるだろうし、わけがわからないことは永遠にわけがわからない。
つまり、わけがわかることとわけがわからないことを混ぜるから、わけがわからない」
「な、なるほど？」
「だから、
わけがわかってることと、わけがわかってないことを、わける。
これがだいじ。

これぞメタ認知。
これが人類を救う！」
「ふーむ……」

……あれ？
それ最近どこかで聞いたぞ？
どこだっけ……

「……しかしあれだ。この話にぱるっぺがこんなに食いついてくれるとは思わなかったから、おいちゃん嬉しいよ」

「そお？　わたしこういう話嫌いじゃないよ？」
「そうなのか。こういう空中戦ってか抽象的な議論みたいなの嫌いかと思ってた。『ヤマハ発動機』の異名を取る超現実主義者のあなたが」
「それポンちゃんが勝手につけたアダ名じゃない。それにわたし現実主義者でもなんでもないよ。どちらかというとロマンチストですよ」
「はあ!?」
「好きな本は『三国志』だもん」
「『三国志』でロマ……んーまあロマンといえばロマンか」

「ロマンですよ赤壁の戦いでね、」
「わかったわかったそのへんは」
「あなにその中途半端な歴史オタウザいって感アリアリの反応」
「なにもそんなこと言うてまへんがな。……ぷっ」
「なに」
「いやさ、丸山眞男が言うんだ
『女は動物か神様である。人間ではない』」
「なにそれー。失礼なー」
「まあまあ。いまの話で言うとつまり、人間の根本矛盾にブチ当たらないように避ける事が巧い、という褒

め言葉だよ」
「あー……つまり現実に貼り付くか、妄想に跳ぶか、ってこと？」
「そそそ、そんな感じ」
「んー……そういう言い方するなら
『男はバカか狂人である。人間かもしれないけど』」
「わはは、そりゃいいな」
「『三国志』読んでると男の人ってなんであんなバカか狂ってるのかの二択なのかと思うよ」
「矛盾は一応意識すんだよ。義理オア人情とか。そこでどっちかを無理めに選択するのがバカ。わけわかん

なくなって理解不能な行動に出るのが狂人、かな。なるほどね。だから俺が苦手なのかもしれない、中国の古典」
「あれっ、そうなの？　杜甫李白に王羲之、藝術の華開く中華大帝国だよ？」
「いや、人がいっぱい死ぬから……」
「ローマ帝国だって戦国時代だって死ぬじゃなーい」
「いやそうなんだけど、なんかこう英雄豪傑だけがクローズアップされて、われわれ庶民がボロ雑巾のように殺されるだろ」
「だから同じだってば」

「描いてないんだよ！　中国人は描くんだよボロ雑巾を！」
「……そっちの方が誠実じゃない？」
「……誠実かどうかはともかく正しい気はしてきたな……」
「でしょう!?」
「なんであんたが威張るんだ」
「中国古典は四大文明ですからね、人類の元ですよ。紙に火薬に羅針盤、ね」
「なんかそこから人類って進歩してないよな」
「そうだねえ……」

……は。あそうだ、それだ。
「そうですよそう、さっきの話」
「ん？」
「『わかってることと、わかってないことを、わける』
それね、孔子様も言ってる」
「ほう。孔子って……儒教の人か？」
「イエース。『論語』に書いてあるのです」
「へー。『論語』か。『名前はよく聞くが読んだこと

の無い一〇の書物』に常にエントリされてるな」
「不幸なことだよね。じゃ『原罪』について教わったお返しに『学習』についてお教えしましょう」
「おおっ、大きく出たな。しかし学校教育などという糞ドつまらん『ためにする』勉強を淡々とこなせる山葉先生の言うことだ、拝聴しようではないか」
「褒めてないねー」
「褒めてるさ。俺には賽の河原の石積みはできねー」
「その考え方を、変えてみせよう」
「おおう……期待していいのか？」
「ふふふ……あその前に河岸を変えませんか」

プリント折りは、とうに終わっていた。

「そうすっか。ミスド？」

「でいいかな」

腰を上げた。

いま聞いた話と、識っている話をひとつにまとめるにはたぶん時間が掛かる。

それならコイツの頭も借りようと思った。

【学習】

――席につくと、ヤツはシャーペンとルーズリーフを取り出して左手でカクカクと女子らしくもない不必要にキッチリした楷書で、

『知之爲知之
不知爲不知
是知也』

「……孔子様に、ポンちゃんみたいな暴れんボーで生意気な弟子に子路っていう人が居たのね」
「最期塩漬けにされて見世物にされた人だな」
「つまんないことだけ覚えてるね！」
「だーらそーゆーことが心の傷になってんだって」
「その愛すべきバカのために孔子様が説くの。『子路や、『知る』ということはどういうことか教えてあげよう』で、こう」
「なんて読むの」
「さっきのとおり。
『知っていることを知っていると認識し、知らないこ

とを知らないと認識する。これが知るということだ』」

「え。……同語反復……じゃないな、えー循環、してないか？」

「うん回ってる。

そしてその回ってることが凄くだいじ。

回すことができるから」

「？？？」

うわあ……ものっそい勝ち誇り顔ですよ……女子が鼻の穴そんなに拡げていいんですかね。

「回ってることはとりあえずおいといて、『知る』ってことはわかる？」
「ああ、確かに俺の話と構造そっくりだ。わかってることを合理的な説明がつくところ、わかってないところは神秘的な領域、と考えれば」
「そそそそ。合理的な部分と神秘的な部分を分けると、話がわかりやすくなるよね、本田理論で言うと」
「へーっ、孔子様偉いな」
「偉いんですってば」
「えっ、ちょっと待ってじゃこれ二〇〇〇年前から孔

子ちゃん問題として認識してたことなの？」
「そ。二五〇〇年かな」
「まあじでえ!?　俺この問題解けたらノーベルなんとか賞かなんか貰えると思ってたのに!!」
「甘いですよ世の中賢い人いくらでもいるんだから。ポンちゃんが考える程度の問題は誰でも考えてますって」
「マジで……いや、まあ、そりゃそうか……」

半分冗談だが、半分本気だ。
今の気分は、パズル雑誌の解答を見ちゃったような、

「ああそういうこと！」という感じと、「解きたかった……」という感じと。

「ふふふ。でもこの考え方って凄く応用が効いて、たとえばノーバート・ウィーナーが説くところのサイバネティックス」

「えっえっえっ」

この人の口から『サイバー』とか。

「フィードバックによって制御を変える、という考え

方は、行動した結果を入力に入れ直してまた行動する、その回路だよね」
「えっと、えーっと、サーモスタットとかそういうもの？」
「まあそういうもの。これは前もってプログラミングできる。
でもウィーナーによれば『学習』は『フィードバック』よりさらに一段階高度な概念で、返って来た結果によって自分を変化させること。いわばプログラムそのものを書き換えること」
「はあ」

「知ってることと知らないことを分けたら、次は知ってることを増やすべく『学ぶ』わけだよね。これって自分が変化して、新しい自分になるじゃない？　これが『学習』の本来の意味よ」

「はー……」

「だから、どんなに今の自分にとって意味や興味の無さそうな物事であっても、『自分を変える』という観点に立ってみれば、わりとなんでも、意義のあることなのよ。

漢文なんかたぶん日常なにも役に立たないけど、それによって変化した自分は、こうして孔子様の言葉に

触れた時、より強い反応ができる。そしてまたこの言葉によって自分を変化させることができる。またそれがなにか新しいヨロコビやシアワセを呼んでくれるかもしれない。

だから、『学習』はだいじなの」

「はー」

なんかスッキリしすぎて、ものすごく騙されてるような気分がする。

「正確に言うと、学ぼうとする姿勢。その姿勢がある

ことを孔子様は『仁』といい、常にそうである人を『君子』と呼ぶ。

そういう人には進むべき『道』が見え、道を行く上で行うべきことが『義』であり、君子がおたがいに学び合うようなコミュニケーションを取っている様を『礼』という」

「ハー」

「『忠』という言葉は文字通り！　自分の『心』の『中心』に従うということで、自己欺瞞に陥らず、自らが本当に正しいと思うことを為す、という姿勢のこと。決して家族や国家や企業の言いなりになることで

はない！」
「ハハー」
「……どう？　孔子様、偉大でしょ」
「偉大偉大。でもぱるっぺも偉大。こんな凄い解釈があの古ぼけた本からできるとは……」
「ただの処世訓なら二五〇〇年も持ちますか。人生の真理、宇宙の真実がそこに描かれているからこそ、貝原益軒も『宇宙第一等の書なり』と絶叫するわけですよ」
「ハハハー！」

俺は思わずテーブルに両手を突いてひれ伏した。

「ふふっ。……種明かしをすると、これ安富先生っていう東大の先生の受け売りなの。最近『超訳 論語』って本を読んで感動してー」

「……なんだもーーーーー！」

腰が抜けるかと思ったぜ。

「ごめんごめん。でも、いいかんじでしょ？」

「いや、素晴らしい。なるほどね……すごいな孔子」

「『東大話法』シリーズもおもしろかったな」
「とうだいわほー？」
「……あっ、だからこれもそうだ。さっきの話。自分を客観視してメタ認知できる、というのが人間の諸刃の剣、って言ってたよね」
「うん」
「『東大話法』というのは、自分を傍観者の位置に置いて、相手を煙に巻き、議論を混乱させて、自分の立場に有利なように持っていく話芸のこと。
　ほら、東大卒の官僚の人の話とか、もう何言ってるかわかんないでしょう。あれは高度に鍛えられた技術

で、つまり『何言ってるかわかんないけど、わかんないのは私が悪いのか？』という気にさせる話法なのよ」
「へーっ。それおもしろいな。けどそういう人、たまにいるな」
「いるよね！」
「いるいる。いる。俺一年の時に生徒会にさ、美術室の利用の仕方で交渉に行ったんだけど、その時の副会長がそんな感じ。
なんかぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ言ってんだけど全然要領を得ないの。ダメって言う根拠がわかんないし、

じゃあなたが責任者として断るんですか、と訊いたらはぐらかすし、じゃ俺達の責任で勝手にやりますよ、つーとそれは困るというし」

「ああなんか目に浮かぶよう」

「そうだ、そうだよそれも合理と神秘の齟齬だ。だからこっちはダメならダメで理由が合理的か、それかもう『しきたり』とか『この先生が許可しない』とか、責任所在ハッキリしてくれるとさ、スッキリするし対応もできるのよ。けどそれがぐちゃぐちゃだと」

「だからそれ、わざとぐちゃぐちゃにしてるのよ。意識的か無意識的かまではわかんないけど」

「はー……え、なにヤストミさん？　メモっとこ」
「本も面白いしネットで講演とか上がってる。京大卒の大阪人だから話が巧い」
「へーっ」
「世の中すごい人いっぱい居ますよ」
「なにそれ、独りでのたうち回ってた俺への嫌味？」
「ううん逆逆。そんな偉い先生や孔子様が考えたようなところに辿り着くなんて、さすが本田宗だ、って」
「また心にも無いことを。……しかし元ネタがあってちょっとホッとしたよ。なんだか幼馴染のぱるっぺがいつの間にか遠くへ行っちゃったようで」

「ふふっ。どこにも行きませんよ。『論語』読んでおこうかな、と思って書店でその『超訳』に引っかかって、そこから芋づるで」
「文字通り『学習』の大切さだなあ。いやー……反省」
「それそれ。反省して行動を改めるのが、『君子』ですよ」
「俺だいたい反省するけど行動改めないからなあ……」
「それはよくないね。『小人』だね」
「とほほ。そっかあ、フィードバック、学習……ああ、

まさに、こうやって、パッと新しい『知』を受け入れることこそ、『知』か」

「そう。わたし思うんだけど、『賢い人』ってつまり学習が出来る人のことだよ。常に学ぼうとしているから、自分の知らない知識や体験について好奇心があるし貪欲に吸収するし、それによって変化していくし、そういう経験があるからいつも謙虚だし、人の話をよく聞くし」

「それぞ『賢人』って感じだな。『勉強ができる』とも『頭がいい』とも違う。本来俺たちゃそういう『賢さ』を目指すべきなのに、なぜか『勉強法』とか『頭

が良くなる』に引っかかっちまうんだよなあ」
「不安に付け込まれてるよね。本来、学習は姿勢だよ。学ぼうとしたら、人は学んでいる」
「うんうん」
「地頭の良し悪しとか、何時間難解な書物に没頭したとか関係ないの。孔子様もおっしゃってますよ、『一日寝食忘れて考えたことあったけど、学ぶに及ばなかったよ』って」
「うーん、うー……俺は、小人だなあ……」
「そんな落ち込まなくても」
「……いや、でもスッキリはしたぞ」

青春に落ち込んでる暇などないのだ。

「ということは、君子であるためにはその学習回路をできるだけ高速・高回転で効率よく回した方がいいな！」

「だーかーらー、そういう生々しい功利的な考え方がそもそも良くないんだってー」

「まあそう言うな。小人だらけのこんな世の中じゃ、自分の性能も上げていかないと東大話法に絡み取られちまうぜ……ってかあんたの方がサクサクお勉強して

るじゃないの！　キーッ！」
「へへへ。わたし本質的にこういうのが好きみたい」
「苦手」
「苦手だよね、理屈通らないこと。ポンちゃん昔からね」
「苦手」
「そのくせ芸術的なもの大好きで……あ、そうか」
「そうそう。さっき言ったろ？　俺、神秘が嫌いなんじゃないんだ。しっかり分けてないものが、嫌いなんだ。だってラピスラズリのお守り買ったことあるもん」

「ホントにいいいい!?　あん、あんなの!?」
「初詣でお札買うだろ神社で。似たようなもんじゃん。売り込んでるから当たりゃめっけもんだし」
「いや……いやー……いやー……わたし占いとかはよく見るけど、あれは買わない」
「買ってみないとわかりませんよなんでも」
「で、どうだったの」
「効くわけねえだろ」
「やっぱり……なに頼んだの」
「山葉さんと恋人になれますよーうに」
「あはははははははははは!!」

「ちょっ、声が、大きい！」
「……すいません、すいません。
……そりゃ効かんわ」
「冗談だっつーの」
「ホントのお願いは？」
「ぴみちゅ」
「どうせ『世界平和』とかろくでもないことでしょ」
「『魔法を信じ続けることができますように』、かな」
「はぐらかした……」
「しかし『学習』こそが成長の源泉だとするなら、G

ＤＰとかで成長とか測れないな」
「そうだね。成長とは変化していくこと、だからね。変化前の物差しは、使えなくなる」
「ならば成長は『学習』の機会の多様化と多数回化か……いろんな人と会ったり？」
「良書を読んだり」
「興味を持ったら現場に行ってみたり。
……ありきたりだけど、やっぱり基本そうなのかなあ」
「そうだよ、わかっててもそれができないものね。めんどくさかったり、気後れがしたり」

「逆に言うと……変化が成長の果実であるならば、変化できないような学習はスカかな」
「まあ、全部が全部無駄ではないでしょうけど」
「あまりかけ離れたところに手を出しても変化できなさそうだし、くっつき過ぎてるとまた変化が無さそうだし。なんか筋トレみたいだなあ」
「アタマもカラダですし」
「今日のぱるっぺはキレッキレだよ。やっぱ筋トレなのか」
「そうね。目標を立て、やるべきことを見える化し、自分が時間あたりにできる量と質とでそれを割り算し

てどれほど掛かるか見極め、あとはひたすら淡々とこなす」
「無理だなあー」
「ポンちゃん頭はいいんだから頑張んなさいよ」
「俺ＲＰＧのレベル上げでも無理なのにそういうの無理。計画立てた段階でお腹いっぱい。飽きる」
「だからそこも『学習』なんだって。飽きないようにやるのよ。やってるうちに計画はガンガン変わるの。いえ、変えるの。思ったより進むこともあるし全然歯がたたないこともあるし、弱点だと思ったことがさほどでもなかったり、長所だと思ってたものが思い込み

だったり、やってみないとわからない。そこを修正して、よりよい計画を立てよりよい実行を為す」
「なるほど、そう聞くと少しマシだな」
「計画スタート時点とは全く違うことをやってることもままあります」
「そうなんだ」
「そう。それがおもしろいの」
「もっと艱難辛苦を耐え忍び、かと思ってたよ」
「それじゃもちませんよ、もちません」
「もたないよな」
「もちません。最高なのは楽しんでやることです。な

んでも」
「だよなあ……」
「ポンちゃんだって楽しそうに絵描いてるじゃない、夜遅くまで」
「うんまあ。……そっか、作品づくりも全く同じだ」
「そうなの？」
「ああ。おおよその完成予想図は頭の中にイメージするよ。でも描き始めるとどんどん『ここはこうしたい』『こっちはこうしよう』が出てくる。それに従って行くと、最初のイメージとはなにからなにまで違う絵ができることもしばしば。……っていうか、ほとん

どそうだ」
「へーっ。わたしああいうのって、イメージがピシーッとできてるもんかと思ってた」
「まそういう人も居るのかな？」
「ほら、完璧主義者の映画監督がメガホン振って『そこは違う！』とかって」
「ああ……いや、それも結局はその時の役者の演技からインスピレーションを受けたりしてると思うよ。むしろ、監督や演出や脚本のイメージを演技で変えてしまうような役者が、いい役者じゃないかな」
「結局じゃあなんでも、始めないと始まらないのね」

「そうだなあ。最終的には現実を動かすというか、実践というか、なんかこう、作品を作り上げるなり、プロジェクトを完遂するなり、しなきゃ意味が無いわけだろ。どうしてもイメージと現実を繋ぐ、接続する、落としこむ、って作業は非常になんというか具体的というか技術的というか物理的というか、泥臭い。

俺も『ここの色出ない』って泣きながら三時間ぐらい絵の具練ったことある」

「そんなに？」

「まあそれは俺がヘタだったりイメージが貧困だからスイートスポットが狭いからだけど。それでもやっぱ

最後頭ん中を『現実』にするためには、まず取り掛かって」
「そこからフィードバックを得て」
「また工夫したり改良したりして事に当たる、その繰り返し、しかない、と。整理して考えりゃアッタリマエのことなんだがな。なんでこんな基本的なこと忘れて腕組みしてウンウン唸るんだろ？」
「いまウンウン唸ってる」
「うわあそうだ！　ヤベエ、ほとんど癖になってんじゃねーか。ええと学習学習、実践実践、と」
「ふふふ。……ねねね、久しぶりに映画観に行こっか。

なんか触発されたよ」
「お。いいね。なにすべか」
ケータイでいつも行く映画館のwebを出して覗く。
「……わたしこれ。『シュガーマン』。忘れ去られた奇跡の音楽が時空を超えて甦る」
「良さげだが……俺は『プリキュア』」
「プリキュアァ!?」
「あっバカにしてるだろお前、これオールスターだぞ、みんな出るんだみんな、ホレ」

「うわっ。なにこれ五百羅漢？　何人居るのこれ」
「たくさん。これみーんな一年掛けて地球を守ってくれた天使達、本物の天使達」
「わかったから。なに、推しメンとか居るの」
「みんな素敵なんですけど強いて言えばキュアピーチ。この人」
「……男の人金髪好きねぇ。ツインテールって言うの？　こんなのファンタジーですよ、こんな髪型。現実に居たらおかしいでしょう？」
ファンタジーだからいいんじゃないか、という言葉

をぐっと呑み込み死神の鎌をかける。

「いや？　そんなことないよ可愛いと思う。春さんにも似合うと思うよ。ちょとやってみてよ」

「えー？」

「いいからいいから。このへんできゅきゅっと」

耳の上の方で両手をくりくりっとしてみると、釣られるようにセミロングの髪を後ろから持ってきてキュキュッと……

激写。

「あーっ！」
「ほらほら、ほら！　かわいい」
「あはははははははははは!!」
「だから、声が、大きい」
「……すいません、すいません、なんども。
ちょっ、これ、消せ！」
「いいのか？　消したらむしろ胸のメモリーにたいせつに焼き付けるぞ」
「酷い……田舎臭い……『花子さん』って感じ……」
「いま全国の花子さんを敵に回したな。あんま変わん

ないだろ『春』と」
「これ小学生低学年までねぇ……」
「しかしこれの似合う俺のピーチさんは普段からこれに近い髪型」
「いくつ」
「一四。身長は一五九。……ほら」
「あー……だからこれは、ファンタジー。いいから消せ」
「あわかったじゃあお返しに俺がピチピチのレザーパンツ履こう。すごいぞ、トランクスのラインが出ちゃうぐらいピッチピチ。だから素肌に履いちゃう」

「それわたしに何の益があるの」
「君の好きなジャニーズやエイベックスや韓国人がよく履いてるではないか」
「その中の特定の個人が好みなのであって、レザーパンツが好きなんじゃないの。わかる？　それよりそんなの持ってるの？」
「善二郎に借りる。あいつバイク乗るから」
「川崎君？　カエル色のジャージか迷彩服しか見たことと無いけど」
「あとタンクトップな。んー……」
「じゃ奢れ映画」

「『プリキュア』なら」
「『シュガーマン』！」
「ちっ。……まあしかし、勉強のことで勉強になりました。ぼくもバリバリ『学習』して成績を上げようとおもいますので、砂糖男にしておきましょうか」
「よしよし」
「いや、なんか真剣参考になったよ。……さっきの話、認識齟齬を、メタ認知をさ」
「あー、はい」
「どうやってその間を埋めるのか、うまく接合させるのか、あるいはメタ認知状態をキープできるのか、自

在に発動できるのか、って考えてたんだけど、あたりまえだけどいいアイデアなんか無くてさ」
「そりゃそうでしょ」
「でもこれってつまり、『学習』が働いていれば常にこの二つの『知り方』について、今どっちが動いてるか、ぐらいの意識が働くから、ま少なくともあんまり混乱することはないよな」
「そう、かな」
「だって自分を変えるには、自分を客観視してる必要があるだろう。もちろん無意識に変わっていくこともあるだろうけど、変わる・変えると意識してる方が、

よりはっきり変わるよな」
「そう、かもしれない」
「これぞメタ認知。ということは、はしょって言うと、『学習』してれば人類は平和だ」
「はしょりましたね。まあでも……そうなるのか」
「……ただ。……おかわり貰っていい？」
「どうぞ。あ、わたしも」
「ここで『わたし行ってくる』と言うとポイント稼げるぞ」
「ポンちゃん以外になら言ってるって」
「ありがとう。

すいませーーん！　おかわりくださーーい！」
「うわあアテコスリ」
「違うって。ここのバイト夜になるとてんでおかわりチェックいかねーんだよ。本部にチクってやろうか」
「クレーマー・クレーマー」
「学習の機会を与えていると評価していただきたい」
「ポンちゃんそのああ言えばこう言う癖、止めないとモテないよ？」
「それが俺様だから！」
「学習しなさいよ」
「これに限っては俺が合理的にも神秘的にも正しい」

「やれやれ。……ただ？」
「ああ。えー……なんだっけ。あそうそう、さっきの逆襲をさせてもらえれば、その『学習』こそ生まれつき濃淡があるもんじゃないか？」
「はい？　なにを言ってるの、誰でも学ぼうと思えば学べるじゃない。効率や速度には差はあっても。あと、学校の勉強は嫌いとか、そういうのはあるだろうけど」
「いやそうじゃない、学ぶためのインセンティブが無い人が居るだろう」
「そんなバカな」

「だって考えてみろ、この世の中なんだから、大多数がやってること見てそれを真似するのが一番効率いい生き方だろ。ほぼノーコスト、学習無し。そんな人いっぱい居るだろ？」
「そういう人はそれで幸せなんだから、いいんじゃないの？」
「うわ、それでいいのか。超現実主義め」
「だってそれはその人の生き方だもの。そんなものまで口挟めませんよ」
「選挙権ある以上付和雷同では許されまい。ポピュリズムに堕して社会が崩壊する」

「それは選挙制度の問題じゃない。あるいは堕したポピュリズムで自分の首締めるのは自業自得でしょ？」
「うわー……じゃ、ま、今はそれは別問題として横に置こう。しかしそもそも学校の勉強は『学習』としてわかりやすいからいいんだが、しかし学校の勉強以外、普段の生活でその、くるくる回る学習回路を発揮させるには……どうすれば？」
「海外旅行に出かける前から現地のお店での買い物を心配するタイプだね」
「想像力の諸刃の剣に切り刻まれている」
「そうね……そう、んー……まあ、仕事では学習が必

要だろうから、それ以外の時はぼーっとしてればいいんじゃないの？　それこそ、犬、猫のように」
「飽きたらん。春理論に従えば、学習こそが人間が人間である所以だぞ」
「本田理論では想像力じゃなかったっけ」
「『想像力』をうまく使いこなす方法論が『学習』だ」
「じゃそれでいいじゃない」
「学習をどうやるか、これが次の問題だ」
「そお？　そんなこと言ってるとその『やり方ｘのやり方ｙ』って無限の階段を上がっちゃうわよ？」

「いや、それはちょっと言葉が足りないかな、つまりフィードバックと学習の違いのように、学習回路が働いて、つまり仁であればいいわけだが、人はこれをすぐ忘れる。

学校の勉強なら『明日学校がある』と毎日わかってるし、いずれ受験もあるし、期末にテストもあるし、学習を意識せざるをえない。

ところが、学校以外では……というか、ほとんどのひとにとって学習を意識する機会はほとんどなく、よって成長もしなければ俺の言う原罪、つまり認識齟齬の解消もできない」

「あわかった、つまり『計るだけダイエット』みたいに、いつも学習を意識できる方法が無いか、って話ね」
「そそそそそ。階層で真上にあがるんじゃなくて横からアシストするような。ま、癖や習慣のものだと思うので、馴染んでしまえばそんなもの要らなくなるんだろうけど……だが我々はあまりにも学習しなさすぎる」
「そうねえ。想像力も暴走しっぱなしよね」
「ああ。いまだって見ろ、他人から見たら俺たち二人付き合ってるのかな、と思われてると思うと背中が痒

い」
「そんな風に見られてるはず無いって。どう見ても……どう……どう？」
「ほら！　ほら暴走してる！」
「えっうそ、だってほら、彼氏彼女っていうのはああいう」

窓際の端の席の俺たちと同じぐらいの男女ペアは、仲良くスマホのイヤホンを半分コにして小さな画面を覗いてにやけていた。

「……しあわせ感が必要だよ」
「しあわせそうだよなあ。……いま不幸せ？」
「……ふつー。ま、ね、人の目なんか気にして、代表にはなれませんから」
「そうだ言いたい奴には言わせとけ。
『走ってない奴は黙ってろ』
これナイジェル・マンセルの名言」
「どなた？」
「イギリスの哲学者。で、なんの代表？」
「そのぐらいの意気込みでいきたいなと」
「はあ……幼馴染の春ちゃんがケンブリッジとかオク

スフォードへ行っちゃうと思うと寂しいな……」
「わたし学問には向いてないね」
「向いてないな。疑問持たんからなチミ」
「あなたが持ちすぎなのよ。官僚とか向いてると思うんだけど」
「向いてると思うわ……向いてると思う」
「狙うか、次官」
「冤罪着せられて途中下車だな」
「怖いよね、日本ひどい国だよね」
「一番ひどいのは国民がひどい国だと認識してないことさ。人権侵害を調査・救済する独立委員会が無い野

蛮国だ、って国連にもう何十年もずっとせっつかれてんだぜ？　ところがそれをダシにテキトーな法案を作っては政局で弄ぶ」
「そうなんだ。わたしも知らなかった」
「ま頑張ってそのトーダイワホーとやらを駆使して、悪を斬る悪に成長してくれ」
「それで取り込まれちゃうんだよね。で本物の正義のヒーローが来て倒される、最後は泣いて後悔する」
「最後泣くぐれーなら堕ちんな、って感じだよなあ。『スター・ウォーズ』とかさあ」
「まあ、ドラマですから」

「なんかその俺最近その『上げて落として落として上げて』みたいなのに飽々してさ。あーはいはい、みたいな感じ」
「『放蕩息子の帰還』は永遠のテーマじゃない。ダメよそんなこと言ってフランス映画みたいなよくわからないもの撮りだしたら」
「いや違うむしろプリキュア」
「いやいや。なんでそんなこだわるの」
「最近むしろ子どもたちにウケる、ってモノの方が普遍性があるんじゃないかと思って……ドラちゃんにアンパンマン。俺もああいうの描いてヨレヨレのジジイ

になった時に『先生！　子供の頃からファンです！』って言われたい」
「そりゃわかるけどさ……あれ何の話してたっけ？」
「春がキャリア官僚になるって話。俺が思うに、『近代』というのは」
「また大きく出るねー今日は」
「近代とは、兵隊と工員と役人を量産するシステムなのさ。国家というのを一つの工場とみなして、その生産効率を最大化するには、決まりきったことを高速・高精度でただひたすらにやり続ける人間が大量に必要だろ？

だから教育、道徳、社会の価値観、全部それに合わせてある。疑問を持ったり、革命を志向したりするのは許されない、とまでは言わなくても無駄と嘲笑される。もちろん、創造もね」

「じゃそんなのもうダメじゃない？」

「ご明察。そう今や決まりきったことは、コンピュータが全部やってくれる。だから人間は、コンピュータにできないことをやるしかない。創造とか、アイデアとか、」

「学習」

「まさに！　さすがにまだ自分自身を作り変えていく

コンピュータは無いから。それこそが本当の意味での人工知能だな。いまは学習機能って言ってるのは要するにフィードバックどんどん入れて元からある選択肢の優先順位を変えてるだけだから」
「でも、それも極めれば学習にならない？」
「んー……よく銀座のホステスさんが人を見る目、みたいな話があるけど」
「ん？」
「それって呑みの場での相対評価しかできてないから、たぶん全く新しいことをドバッと言ったりやったりする人は、まったく評価できないと思うんだ」

「はあ。あー……そうかもね」
「さっきもあったように、既存の評価軸で評価できないこと、こそが新しい価値を生むので、前もって評価軸を与えられている時点で、本来の意味の学習にはならないと思う。ちょっと自信無いけど」
「ふむ……じゃやっぱり、学習がたいせつだね」
「そうだ。それを高める手法の開発も。よし、じゃあ宿題にしようか。次官候補も考えておきたまえ」
「えー、簡単に言うと『勉強するモチベーションの湧かせ方』でいいのかな」
「ま言っちまえばそんなとこ」

「金、男、地位」
「お、肉食系」
「要らないんだよね、正直」
「ある程度でいいんだよなあ。だから先進国どこでも自殺しまくるんだよ。目標無くなって」
「自己実現？」
「それってなんだ、いったい。その中身の無い文言に俺たちは二〇年振り回されたんじゃないのか！」
「確かに何を意味してるかさっぱりわからない言葉よね。生きがい？」
「だからそれはトートロジーだって。『やる気になる

原因』をまとめてそう呼んでるだけだから、訳すと
『やる気の源泉はやる気』」
「あそっか。んー……単純に、暇だから、っていうのは？」
「うお、おまえ暇だったら勉強するのか」
「何もやってないと不安になるじゃない」
「まあそうだが。確かに、ナメクジも暇だと死ぬらしい」
「ホントにぃ!?」
「うむ。同じ迷路を何度も解かせていると、そのうち『それもう飽きました』と言って動かなくなって死

ぬ」
「ホントかなそれ……でも暇はそれぐらい怖いよ」
「だからって昼寝でもいいし享楽的かつ麻痺的な遊戯でもいいわけだし」
「それも飽きるんだってば。ダメばっか出してないで君も考えなさいな」
「考えてるからダメが出るんだろ。さあ考えろ、おおげさにいえば、『生きる意味』を」
「うーん……真面目に考えたことないなあ……」
「ハルというその名のとおりしあわせな奴め」
「ツカサくんがその名のとおりなんでも思う通りにし

ようとしすぎるんだよ」
「そおかなあ？　でも人として生まれたからには、自分の人生ぐらい思う通りに生きたくない？」
「ある程度はね。全部は無理だよ」
「自分が動かせるところは、さ」
「辛くない？　その生き方」
「納得してないものに従う方が、つらい」
「ポンちゃん真っ正直すぎるのよ。うまくごまかせ。逃げたり、いなしたり」
「男にはそれじゃ許されない時があるんだよ」
「それで体壊したら元も子もないじゃない。誰も評価

してくれないし」
「……」
「あ、怒った？」
「いや……そのとおりだな、って。女の子は現実的だな」
「わたしが」
「ああはいはい。じゃきっと宿題にも現実的な解を用意してくれることだろー」
「あなたも考えなさいってば」
「考えたけど出ないんだってば。俺のポリシーはできるだけ楽をしたい。楽をするためにはどんな努力もす

る。学習とは正反対！」
「いや、それこそが学習ですよ。やり方を改良し、アイデアを出し、優先順位を付ける。ほらほら、がんばって」
「いやだーかーらー」

たぶん、そう言われると自分がなぜ勉強をシコシコしてるのか言語化できないので押し付けているのだろう。

しかしきっと僕らのぱるっぺなら何かテキトーな答えを見つけてきてくれる、はず、ではないか、と思っ

た。

「……でもポンちゃんさ、気をつけてね」

「ん？　なにが？」

「人生って、世界って、ままならないものだよ。ポンちゃんみたいに想像力豊かだと、その、ままならないことそのものに、いつも気づいてしまわない？」

「……」

時々切っ先を突き刺してくるんだよな、この人。

「『うまく』生きるためには想像力を時には部分的にでも封印したほうがいいよ」
「それは俺が俺でなくなるということだから、要らん。誇りを喪って生きていけるか」
「生きないと誇りも持てないよ。
ほら、インテリの人よく自殺するじゃない。きっとここの矛盾に気づくと絶望するんだと思う。生きるためには、インテリを止めないといけない。でも止めたくない。だけど孔子様ですら、不遇だったわけだし」
「そこで折れなかったからこそ二五〇〇年生き続けてるんじゃないか。大きな目で観ると人類は、成長して

るよ、きっと」
「メタ認知ですか。好きねえ、それ」
「でなきゃなんの意味もねー絵なんか描かねーよ」
「機嫌、損ねた？」
「いや全然。俺インテリじゃないし」
「芸術家も、同じだよ」
「……」

　ままならないことなんかわかってる。だから、ままなるところはできるだけままであろうとするんじゃないか。

あるがままで。
……手を取られた。

「死んじゃダメだよ」
「死なん。そう言ってくれる人が一人でもイメージできるうちは、その人に悪い」

離される。

「……想像力って、原罪だね」
「だが力だ。たぶんこの構造的な矛盾こそが、人類を

前進させてきた力の一つだと思う」

ねじれているから、なにかによってそれが解放されると、勢い良く回るのだろう。

「……人間は仮面を被る。他者とコミュニケーションを取りやすくするために、言いたいことやりたいことをある程度我慢して、社会性を身につける」

「うん」

「ところがそれがうまく行き過ぎると、仮面が力を持ちすぎて、素顔を乗っ取ってしまう。仮面に食い殺さ

れる」
「うーん」
「人の気持ちを想像できる、という力は逆に、そんな悲劇も生みかねない。心優しい人だけじゃなくて、ほとんどの人がこの想像力の逆の刃に血だらけになっているんじゃないかな」
「そうかな……わたしそうでもない」
「まあ、ヤマちゃんはね」

この人は思ったこと言うので男女問わずアンチが多い。ただの一言も言葉を交わしていなくても、だ。も

ちろん俺や川崎や鈴木のように、その裏表の無さをこそ信頼する仲良しもいる。しかしその状況で平然としていられるのが、「強い」と思う。

まあ、俺が気が小さ過ぎるのかな。いかんな。日本はダメだとか言って自分が典型的な日本人つまり一番痛いところを突かれてるからこそ発狂するという、まさに唾棄すべき似非知識人に成り果てている。しかし

「……ポンちゃんもっとお気楽に生きなよ。きもちいいこと、きもちよくやって」

「やってないわけでもねーんだがなあ……映画観よ映

画」
「うん！　楽しみー」
「俺も。ラブサンシャイーーーン」
「ちょっ、やめて、やめて。それは観ないからね!?」
「フレーーーッシュ！」

『長時間の勉強はお断りします』
という貼り紙が目に入った。
アホめ、人生いつでも学習だ、っつーの。
春の受け売り。

【芸術】

――宗が待ち合わせ場所に着くと、見知らぬ女の子に手を振られ……

「ばははははははは!!」

ピッグテールも輝かしい春だ。

「ここ笑うとこ？」

「いや、いや失礼。ひょっとしてワタクシのために？」
「そ。映画奢らせるのがちょっと忍びなくなって、せめて出オチで笑いでもプレゼンツしようかと」
「元取りました」
「では」
「いやいやいやいやいや、今日はぜひそのままで、そのままで」
「えー」
「似合ってるホント似合ってる。さ、観るか『プリキュア』」

「そんなこと言うとこの『韓流スター咲き乱れ！　華の大江戸白虎隊』を観るよ」
「なんだこれ……」

――しかし一本目終わると昼まで間があったので、二本目も観た。

「……ふふっ。『プリキュア』楽しかったよ。弱い子が勇気を振り絞るところとか、泣けたね」
「そうだろ？　しかし『シュガーマン』は感動したなあ。まさに！　芸術家たるもの！　あのように生きね

ば！」

サンドイッチハウスで野菜マシマシを二本ずつ。頬張りながら差し向かい。

「……なにニヨニヨしてんの」

「いや見慣れてくるといいなあ、って。春、もうそれで通せよ髪型」

「いやだあ。こういうのはプリキュア達みたいな、ブワッとボリューミーな髪質でないと……宗、やってみれば？」

ふわ、ふわ……
「ほら、素敵な猫毛。……あ、ちょっと薄くなってない？」
「エッグッ!?」
「嘘。そんなに喉にモノ詰めなくていいじゃない」
「せめて、せめて人生五十年下天の内をくらぶれば……くそっ、ちょっと見せろ分け目」
「自信あります」
さわさわ……
「真っ黒黒助出ておいでだな……平安貴族かおまー」
「七つまで毎朝髪剃るんだっけ」

「三歳ぐらいかな。髪置の儀が七五三の原型になったとかなんとか。ツヤッツヤだな……なんだワカメとか踊り食い？」
さわっ、さわっ……
「なんにも。なんにもしない方がいいらしいよ。お湯で流すだけの方が」
「らしいなあ。俺脂症だからかそれじゃベタベタなんだよ」
「それはね、しばらくすると抜ける。だいじょうぶ」
「そうなのか。んー……やってみっか」
「おすすめ。……あでも」

ふわん、ふわん……
「この髪質だと……」
「口ごもるなよ」
「あーでも映画おもしろかった。方や子供向け、方や無名のミュージシャンの話、なのになんでおもしろいんだろうね」
「それさ」
「お、ゲージツカさんの解説？」
「いや、俺もまだわかってないんだが、聞いてくれる？　なぜ芸術がすばらしいのか」
「うんうん」

「俺も絵を描いているからさんざんいろんな要素を検討したのよ、芸術における『おもしろさ』とは何かって」
「うん」
「要素要素で見つからないわけではない。演劇を例に挙げよう。たとえば役者の演技が巧い、たとえばバッチリ合った音楽が盛り上げる、たとえば脚本がジェットコースター」
「そうね」
「ところが。まるで諺のように真逆のケースも見つかる。役者が大根だけどむしろそれが迫真を生む。音楽

がミスマッチだからこそ面白い、脚本なんか無いに等しいから人物の心情に迫れる」
「ありそう」
「そう。ということは、この要素がこうあれば優れている、という方程式みたいなものは、無いんだ」
「ふむ」
「せいぜい言えるのは、このケースの時はこういうやり方がいい、ってことだけど、そんなもの組み合わせ無限にあるんだから、一々覚えてもられないしチェックもできない。
そう考えると最早『おもしろさ』が何かなんて、俺

にはわからなくなってしまった」
「アーティストは悩むのはそこなのね」
「そうたぶんここ。つまり芸術の本質的価値は、『意味』でも『技術』でも『官能』でも無い。そこに気づいてしまう。ここで道標を失って、道に迷うんだ」
「ウケる、売れる……はもっとダメだね」
「それらはもちろん否定することじゃないんだけど、自分ではコントロール不可能な事柄なので、そこに評価軸を置いてしまうと、あとは発狂するしかない」
「ビジネスではないもんね」
「まあビジネスとしてやってる人もたくさん居るけど。

とりあえず意味技術官能、もちろん媚欺瞞おためごかし、それらは、本質的な価値……ここでは仮にその作品の『生命力』とでも呼んでおこう……を阻害する、ことがある」

「なかなかコペルニクスなご意見だね」

「もちろん俺が例では信用がないので、いい例を上げよう。我らが師匠、近代絵画の父、セザンヌだ。

彼の絵を観れば一目瞭然、田舎の風景にテーブルの果物、つまり、『どうでもいいもの』を『巧くもなく』『美しくもなく』描いて、しかしそれは」

「すばらしい」

「そう！　誰もがセザンヌを持ちだされればハハーとひれ伏すしか無いんだ。あんな濁った色で埋まるどうでもいい絵にね」
「はー……それはわかりやすい例だね」
「もちろん意味・技術・官能を全否定するわけじゃないんだけど、それらはあくまでその生命力を高めるために貢献しなきゃならない。でなければ阻害する。
　ということは。
　ここに至って俺が考えたのが逆作戦、つまり生命力の阻害要因を排除する、ということ」
「ふむふむ」

「そうそう。仮に、よ。
芸術が自然の再構築だとするなら、受け手の自由な再構築を阻害する要因を探す。と、一番最初に思いつくのが実は『作者の意図』というものだ。
コミュニケーションと同じで、というか、芸術はコミュニケーション以外の何物でもなくて、『相手をこう誘導してやろう』とか、『相手にこう思われたい』という要素は、ありすぎると自然なコミュニケーションを、阻害するんだ。まあウケ狙いとかも広くここに含んじゃってもいい」
「だけど、芸術家ってみんな『これを伝えたい』と思

って得物を持つわけだよね？」
「そうなんだ。ここが矛盾しているのが、例の昨日教えてくれた学習の『知』の話だよ」
「あー……」
「伝えたいことを伝えられるところと伝えられないところにわけて、伝えられるところを的確に伝えて、伝えられないところは受け手にまかせる、って感じかな？
　自分の言いたいこと、と、自然に湧いてくるイメージ、の線引きをしていく作業が、実作、作品づくり、かもしれない。

近松門左衛門の『虚実皮膜論』っていうのはこのへんのことを言ってるんじゃないかと……」
「なに、それは？」
「脚本の神様・近松先生がおっしゃるには、『虚と実の、皮膜のうちに芸がある』。
俺はこの言葉の意味もずっと考えてたんだ。ホントみたいな嘘をつけ、ってことかな、とか」
「あるいは、生々しい現実そのものではなくて、エンターテイメントとしてオブラートに包め。ドラマなら主役は美男美女で」
「そんな感じ。でもそんなあったりまえのことを、さ

も秘伝かのように言うのかな……と思ってさ。あるいは桂米朝師匠が、
『極まると演者は消える』
って言うんだ。でも俺達は『米朝の落語』を聴いている」
「そうだね。極まれば極まるほど、演目とか、落語ですらなくて、『米朝』を聴いてるよね」
「そうなんだよ。クルマでもベンツはベンツっていうんだ。C180とか、車名ではあんまり言わない。作品というものは、作品ではなくて結局作者でしかないのかな、と」

「自分を消せば消すほど個性が出てくる……おもしろいね」
「矛盾というか、逆進性というか……」
「あ、でもそれって学習と同じだね。学ぶ時に、自分ってまあ言えば要らないじゃない？」
「ああ、余計なものあると邪魔だな」
「そう。いったん虚心に取り込んで、自分の中で化学変化を起こして、自分を変えるんだよね。
芸術の創造の流れと同じだよ。
ううん、その流れを『創造』というのかもしれない。
学習を阻害することって、想像力を阻害することだ

から、つまり創造力も阻害してしまうよ」
「そーうなんだよなー。だから芸術のおもしろさ、っていうのは、原因はまだよくわからないんだけど」
「それこそ神秘だね」
「ああそうそう。そう。そうだ、神秘そのもの。ともかく、結果としては、受け手がその作品に触発されて生命力を高めるようなもの、それが『おもしろい』ってことなんだろう、と思うわけさ」
「抽象的だけど、まあ納得」
「すまん。もちろん、作家によってその『力』を生み出す方向性は違う。ある人は人間の姿、ある人は真実

の強さ、ある人は笑いの癒し……」
「今日観た映画は二本とも、登場人物が真摯だったよ」
「そうだね。ああいう姿勢、『なにがあってもこれを貫く』ってことは人間、できそうでなかなかできない。だから憧れる。これもまた、人間の生命力のひとつ」
「そうなんだよねえ……ターキーブレストかえびアボカドかなら、ツッパれるんだけど」
「だよなあ……」
二人は二つ目を頬張る。

「だいじなことほど、折れちまう」
「むしろだいじなことで折れてるから、日常で八つ当たりのようにどうでもいいことで折れないんだよね」
「店にクレームつけて発狂してるオッサンオバハン見てるとああ恵まれてないんだろーなって可哀想になる」
「一人の人間として扱わずに、客っていう抽象存在として扱うお店にも責任あるよ。昔ながらの商店街とかならあんなこと起きないもん」
「しかしある程度匿名性をキープしないと都市生活は

やってけんから……ほら、ここだってもし顔なじみだったら、ここ映画来るたびにここ来なきゃいけなくなるだろ？」
「まあねえ。難しいね。
でもおもしろかった。今度からそんなところを注意して観てみるよ」
「いやいや、まだ極意とかわかんねーんだけどなあ」
「特に『芸術はコミュニケーション』というところがカッコ良かった。そういえば、いい作品との間には、なにか感情が交流するような気がすね」
「そうそう。『グッとくる』とか『ピンとくる』って

ヤツさ。それには、テーマも巧拙も完成度も、なんも関係ねー」
「うんうん。その、感動が伝染していくようなものが、いい作品だよね」
「いいこと言うねえ。そうそう。思わず誰かにこの感動を伝えたいと思う。それはまた芸術を生む」
「あっ、そうだねー。じゃ増幅していくんだ」
「いいねいいね。この輪が波紋のように拡がっていくと、人類は幸せになるのだがなあ」
「波紋は広がるにつれて力を失うんだよね……」
「だからそこを受けた人が力を出してさらに増幅して

だなー」
「ネット世界ってそんな感じ」
「ま、一番いいケースではそうだな。伝染力は芸術の大きな力のひとつだね」

ジンジャーエールとハーブティーを傾ける。

「……ハーブティーてのも大雑把だな」
「たぶんカモミールがメインで」

差し出されるカップ、交換して。

「……ジンジャーエールたまに飲むと美味しい」
「……んー俺の鼻では他にどんな草が入ってるかわからん」
「草って言うな」
「同じだろコカインや大麻と。薬草なんだから。人間が差別してるだけで」
「まー。生姜だってそうじゃん」
「もちろん」

戻す。

「……あ、んじゃあ、昨日の宿題の答え合わせすっか。『学習のサイクルを加速させる方法論』」
「ふふふふふ、なんかもう答え出てる気がするけど」
「そうだな。じゃあせーの、で」
「せーの」
「「芸術」」
「あはは」
「ははっ。いや意外なところから答えって飛び出してくるもんだよな」
「ううん、論理的帰結だよ明智君」

「えっそれ誰のセリフなの」
「ホームズ。じゃわたしから論理的な説明をしよっか」
「小五郎聞きます」
「かんたんなことだよ。つまり、『学習』のサイクルを回せば回すほどいいんだから、一番いいのは、サイクルを回すことそのもの、学習そのものが楽しいこと、だよね。すなわち……あたりまえのことだけど、おもしろいと感じることをやること」
「うんうん」
「サステナビリティって言葉があるけど、なんでも持

続可能であれば必然的に学習が進んでより進化するわけだから、持続可能性をキープすることが先決だと思う。

いわば学習の永久機関だね。

好きなこと。楽しいと思えること。それから、底なしに追い求められること。

それってすなわち……芸術の、ことじゃない？」

「うむ」

「学習サイクルが永遠に回ること、それは学問でもスポーツでも手工芸でも、料理でも庭いじりでもそれこそボランティアでも、なんでも芸術なんだよ」

「すばらしい」
ぼふぼふとサンドイッチの紙を叩く宗。
「予想外に素晴らしい答えに本田感動しております」
「えっへん。……予想外とはこの山葉、甘く見られたものだね」
「なるほどなサステナビリティな、流行りの単語も交えさらには『なんでも芸術なのよ』と全方面にいい顔をする。百点の解答だ」
「そういうポンちゃんは？」

「あいや俺のは妄想科学なんだけど……聞いてくれる？」
「わざわざ断らなくてもいつも妄想じゃない」
「可愛くねえなああんたは……ゴホン。えー俺は逆に、想像力つまり原罪がほおっておくとなぜ減衰していくのか、意識から落ちてしまうのか、こっちを考えた」
「阻害要因を潰すわけだね」
「そう。脳という器官が凄まじい大飯喰らいなのはご存知だと思うが、つまり想像力のエンジンである脳も、いや順序が逆か、とにかく脳こそが、諸刃の剣なんだ。使うと大変強力だが、ものすごいコストが掛かる」

「ふむ。なんとなくわかる」
「だから基本的には、人間考えたくないんだよ。エネルギーを浪費するから。だから、抽象概念を発達させ、言語を発達させ、その伝達手段を発達させて、『一回誰かが考えてくれたことは、考えなくても使えるように』した。これ素晴らしい工夫」
「なるほど」
「つまり環境や状況が変わらない限り、『言い伝え』や『しきたり』、時代が下れば『常識』や『法律』を守っていればのんびり生活ができる。判断しなくていいからエネルギーを使わない。ところが」

「そうはいかないよね」
「そう。さまざまな要因で環境は変化しうる。その時、頭を使える人間が存在しないとヤバイ。だから脳、いや想像力を、刺激し続ける必要がある。半ば強制的に想像力を起動させる方法……これがすなわち、芸術」
「なるほどー」

ぱしゃぱしゃと紙コップを叩く春。

「美術の先生に聞かせたいぐらいの名調子だよ」
「それは今でも何千年も続いていて、太平の世の中で

あるならば、せいぜい与えられた正解を暗記して高速で出力する官僚的能力、これが求められる。だからそういう人物が生存競争上有利になる。

ゲームのルールに疑問を持ってたら、ゲームには勝てない。

けれども環境が変化し激動の時代になって、ゲームそのものが変わったり壊されたりすると、ルールを考えるような人間、こっちが必要になる」

「あっ、それって構造が似てない？　ポンちゃんの二つの認識齟齬と」

「結局陰陽図みたいなもんで、二つの方向がミシミシ

音を立てるところにダイナミズムが生じるのかもしれない。
ともかく、革命家は現在のルールで勝っている人間にとっては邪魔だから」
「排除される。けれども環境の変化が大きくなりすぎるとどちらにせよルール変更すなわち革命は起こる」
「ただ、起きてしまえば、また新しいルールが必要になるので、革命家は不要になる。西郷隆盛は城山で死にチェ・ゲバラはボリビアで死ぬのさ」
「哀しいねえ……」

オーブンポテトに手が伸びて譲りあう。

「……とにかくぱるっぺ的に言えば、自分の中にそれぞれの『芸術』を見つける、作り出す、ってこったな。趣味でも勉強でもなんでも、その中にずっと浸っていればしあわせ、みたいな」

「ポンちゃん的に言うと常に意識的に頭を使え、とにかく考えろ、ってことだね。そうしないとすぐ使わなくなる」

「ＴＶ観てると学者でも芸術家でも馬鹿としか思えないヤツいっぱい居るじゃん。反面お百姓さんや職人さ

んで叡智の塊みたいな人がいる」
「そういう人達は、決まったことをやってるようでいて、毎回違うのよ。だから全身全霊で立ち向かってるんだろうね。逆の人達は、自分の頭の中にある決まりきったことをやってるだけだから、貧しい」
「それもたぶんポイントで、頭、って言ったけど結局全部なんだ、身体感覚とか、第六感みたいなもんとか、カラダ全部、全人格」
「そうだよね。それもこうくるっと一周したね」
「うん。合理と神秘と、両方」
「ということは、芸術に取り組んでいると、そこもう

まく噛み合うようになるのかな」
「だといいな」
「いいな、って絵、絵画、描いてるでしょ」
「いやあ……あんまり噛み合わねーんだよ……まあでもそこがおもしろいといえばおもしろいんだけどなあ……」
「ふふふ。ポンちゃん、映画は撮らないの？」
「無理無理。子供の頃一度ビデオ回したことあって」
「撮ってるじゃない」
「あの画面一秒一秒全部計画通りの画面作らなきゃなんないんだぜ、役者だけじゃなくて背景にライティン

グ、全部。映画なんて狂人の作るもんだ」
「でも結局なんでもそうじゃない？　劇もそうだし、マンガだって、そうアニメだって。小説だってそうだし」
「まあ、まあ、そういやそうなんだ、けどさ。逃げらんないんだよ。マンガとか劇だと書割ボーン置いて『ヴェルサイユ宮殿』とか言えるけど。そんな映画嫌でしょ？」
「まあそうだけど」
「抽象性を極限まで追い求めることで普遍性を得るのが詩なら、逆に具体性を追い詰めて普遍性を生み出す

のが映画だと思う」
「ん？　具体性を追い詰めて普遍性を？」
「えーっと、なんてかな……そうださっきの『なりきる』って話。
　芸術はなんでもそうなんだけど、いわば『自然を、創作者が、再構築する』、わけさ」
「うん」
「そんときやり方は方向性として二つある。
　ひとつはできるだけ記号のようにして、たとえばここに」

紙ナプキンに、『花』と書く。

「……これ花だ。ぱるっぺはこれを観て自分の中に何か花を想い起す」

「なるほどね」

「自由度が高い分、豊かでもあるが、作家が受け手に委ねる部分が大きい。自分のイメージが伝わる割合は低い」

「ふむ」

「逆に」

チューリップを描く。写実的に。赤ボールペンで色も着ける。

「これも花だ」

「つまりポンちゃんのイメージはより伝わるけど、わたしのイメージは限定されるね」

「そう。けど、チューリップを観て欲しい、体験して欲しい、と思ったらこっちがいい。

さっきのが詩で、これが映画。

具体的な場面を作りこむことで臨場感たっぷりに擬似経験してもらって、そのことでむしろ想像力を掻き

立てる。本当にヴェルサイユ宮殿の中にいるマリー・アントワネットになってもらう。
芸術での『うまさ』という言葉は本来、この想像力を掻き立てる力の大小に使うべきであって、技能的な精度や密度に使うから話が混乱するんだ。せいぜい表現力の幅に対して使うべきであって、誰と誰を比べて、とかなんの意味もない。
そう芸術は、どれだけ魂を震わせられるか、それ一点だ！」
「ポンちゃん……いろいろ考えてんだね」
「まかせろ。考える前に絵筆を取れといつも叱られて

いる」
「おーおー可哀想に」
「芸術家がー！
官僚か商売人のようなことをー！
言い出したら終わりだー！」
「でも映画観る方的には封切りに間に合って欲しいのよ」
「はいおっしゃるとおりですすいません。
まあでもなあ、『効率』って近代的な考え方が芸術をダメにしてる部分はでかいと思う」
「そうだね。そういうのに追われる毎日から逃れられ

るものが、芸術やエンターテイメントだから。本来は、一番そういうところから遠いものじゃないとダメなはずだよね。無駄なら無駄な方がいいというか」
「うん。芸術、教育、医療に福祉、それから食べ物とか水に空気、安全。とにかくだいじなものほど『効率』で語れないものばかりだよ」
「元々その『時間で割る』って概念そもそもが、大昔には無さそうだね」
「そうかもしれん。悠久の流れの中の仮住まい、的な。やっぱり商売と、なにより工業生産が強めた概念じゃないかな」

「進化の意思といえばそうだけど」
「またおんなじ話だけど便利な道具ほど諸刃の剣なんだ。使うべきでないところにまで使っちまう。誇りや尊厳、敬意、愛情。感動に心の平安、そんなものだってどれだけ侵食されてるかわかりゃしねー」
「あるある。パック旅行の分刻みとか。本末転倒だよね」
「気持ちはわからんでもないんだがな。ガウディじゃあるまいし三百年掛かりますと言われても困るのは困る」
「それこそサステナビリティじゃない？　次また来た

いな、とみんなに思ってもらえば、それでいいんだよ」
「……ふむなるほど。それはいい線引きかもしれん。芸術とカネはいつも綱引きになるんだけど、『最低限の持続可能性を担保する』ってのはいい頃合いだ、つーか自動的に物理的にそうだし」
「そうかも。レオナルド・ダ・ヴィンチクラスになると、描きかけの絵でもありがたがられるもんね」
「キューブリックが赤字の映画ばっかりだったりな。いやさすがぱるっぺ」
「ふふ、これも実は受け売りなのよ。P・F・ドラッ

カー」
「あーなんか女子高生が読むヤツ」
「ふふっ。彼が『利益は、会社を持続させるために必要なものであって、目的ではない』と喝破したのね」
「じゃ目的は？」
「社会貢献。社会にとって存在意義がある企業が、生き残る」
「なあるほど……俺の絵は存在意義あるかなあ……」
「あるわよお。美術部の展示無い文化祭なんて第一恥ずかしいじゃない」
「かたじけない。ウチの学校喰いもん屋ばっかだかん

な……」
「あれちょっと異常だよね。なんであんな食い意地張ってるだろう……でもそう考えるとみんな感謝が足りないよねポンちゃんたちに」
「ははっ。まあ書道部や陶芸部や文芸部や演劇部やブラバンや……みんな居るから。
芸術ってのはそういうものさ。要らないもんなんだよ基本的には。でも、あるといい。
今の話でいうとつまり触媒みたいなもので、人の想像力をぐっと掻き立てる。それが社会の力に、きっとなる」

「じゃやっぱポンちゃんたちに感謝しなきゃ」
「何を言う、君もやるのだ芸術を。さっき自分で言ったろ、『学習サイクルが回るものはなんでも芸術』だって。絵筆を取れば誰もが画家、文章を書けば誰もが作家、だ」
「でも私の絵じゃサステナブルじゃないよ」
「いーんだそんなの。『画家』と、『絵でお金を稼ぐ人』は、別！　だいたいマンガ家や作家になろうとして挫折した人の話聞いてると『マンガ家になりたい』って話ばかりで、『こんなマンガを描きたい』って話がないんだよ。描きたきゃ描きゃいいだけさ。その瞬

間から誰もがマンガ家」
「ポンちゃんらしいなあ……じゃ明日から画伯と呼ぼう」
「ああ今日から呼び給え。いやまだ修業中だから伯はつかないかな……」
「一生修業じゃないあんなの。でもわたしポンちゃんの絵好きだよ、なんとなく」
「なんとなくか」
「いいと思うんだけど、優しすぎるのかな。あんまりこう、グサッとこないんだよね」
「グサッ」

「だから人に薦めにくい。お金を出そうとも思いにくい」
「うぅう……き、きたんなきごいけんを……ぐふっ」
「あっ、ごめんごめん。でも、好きだよ」
「うぅ……何が足りないのか……」
「そこはこれから考えなきゃ」
「俺はまだ画家じゃないのか……絵筆を取ったら画家だと思っていたの、だが」
「なんだろうね、そのピリッとしたもの、って」
「んー……芸術は基本的には自給自足なんで、まず自分が満足しないと始まらないとは思う。俺は一応、俺

の作品にはいつもそこそこ満足はしてる」
「そこそこじゃだめなんだよきっと。説得力がない」
「んー、そおかもなあ……俺が思うに、絵に限らずなんでもそうなんだけど、要は感動の源泉って『差』だと思うんだよ。ズレ。落差。段差」
「どれだけ大きく跳べるか、ってこと？」
「いや、差は別に大きくなくていいんだ。意外性というか、驚きというか、ナックルボールというか……ここで『どう差をつけるか』なんて技術論になるとさもしいんだけど。
普段そんなことしそうにもないぱるっぺが可愛い髪

型してるから、可愛いんだ」
「普段可愛くないの？」
「褒めてんだから素直に喜べ。
普段からそんな髪型の子が多少ひねっても、あまり感動はない」
「なんとなくわかる」
「んーなんてったらいーだろーなー……そう、予測のつかなさ、というか。自分でも。一筆入れたら、そこからの刺激でさらに新しい一筆が新境地に入れられ、どこへ連れて行かれるんだろうと自分が一番ワクワクし……」

「まったく学習と同じじゃない」
「あ、ホントだ。……じゃ俺には、学習するという姿勢が足りないのか」
「ふふ、そうかも。ほらポンちゃん謙虚なくせに自信家だから」
「うあ耳が痛い……でも芸術はもちろん、想像力そのものでもあるから……確かに想像力には新しい想像力を生むポジティブ・フィードバックがあるね。
……ということは、だ。これらはつまり円環、回路になってて、原罪であるところの想像力を働かせれば、学習回路がよく回り、それを維持し続けるには芸術に

昇華することが必要で、芸術ならば想像力をまた高めていく。逆にも回る。想像力を発揮すればもちろん芸術が高められ、それはよき学習を呼び、また人類を楽園から追いやる想像力を膨らませる」

「おー、美しいサイクルだ」

「原罪・学習・芸術。これを『ＧＧＧ』と名付けよう」

「美しくない。『トリニティ・スパイラル』とかなんとかさー」

「うつ。それ割といいな。いや、いや駄目だ、そういう『それっぽい』カッコ良さはもう古いんだ、そうも

っとナチュラルに」
「なにオロきてんの。でも、つまり、このサイクルそのものが人間の宿命……みたいだね」
「そうだなあ……だから、楽園から出てしまった、つまり飛んでしまった以上、飛び続けるしかないのさ。選択肢は無い。だとしたら、飛び続けられるように飛ぶしか、ない」
「やれやれ、だね。でも、なんかすごく、こう、生きるってことの心臓部、エンジンを見てるような気がする」
「エンジンなんだって。つまり『生きる』ってことは

このサイクルを回すこと、そう、『生きることそのもの』が目的なんだ。
だから『生きる目的』って言葉は本当は、無いんだよ。
あ、俺なんか今いいこと言ってる」
「ふふ、そんな感じだね。……昔観た映画でね、岩手の山奥でおじいさんと二人だけでずーっと暮らしてたおばあさんの映画があって」
「うん」
「一日のキツい労働が終わったあと、お茶を飲んで『はぁ〜、極楽』って言うの」

「それだ」
「それだよね。決して辛さからの解放が言わせた言葉ではなく」
「『知ることとは知らないことと知っていることをわけること』なら、生きるとは、生きてるってことを確認しつづけることだ」
「逆に生きることそのものが極楽である、平安である、なら、そう感じられる生き方を模索して、じりじり近づいていく、その動きそのものが生きるってこと、かな」
「そうとも言える」

「じゃやっぱり、その意識を持ち続けるためは、このサイクルをぐるぐる回さなきゃ」
「だから……とどのつまりは最後の締めは、そのおばあちゃんがいつも心に持つもの……そうすなわち、愛！」
「基本だね」
「このサイクルは回そうとしないと回り始めない。最初の火種、最初の一手、これこそが愛」
「うんうん。勉強もとりかかるまでが大変なんだよね」
「絵もだよ。描き始めりゃ勝手にできてくんだけどな

あ」
「慣性もあるけど、結局のところ、このサイクルって閉じてるから、最初のひと押しは『何か』が必要なんだよ。スイッチ、オンっていう」
「それはもう愛以外考えられないな。
どんなに小さな作業でも誰かを痛めつけると思えば気が引けるし、かなりキツイ仕事でも誰かが喜ぶと思えば取り掛かれる」
「まったくそのとおりだね」
「愛さえあればこのサイクルが回り始めるし、大きく回るし、楽しく回るし……なんか物事始める時ってさ、

重い玉を山頂まで力いっぱい押していくイメージがありすぎるんだよな。

これもきっと『近代』の罠だぜ。自分に合わないことでも頑張れ頑張れって、国家や組織にとって必要なことを無理にやらせる。それができない人や反発する人をダメ人間扱いすることを子供の頃から繰り返して、従順な奴隷を量産してんだ」

「うーん。でも人間が生きていくためには社会というかコミュニティへ適合したり、仕事の能力を高めたり、ということは必要だから……でも確かにその境目は、曖昧だよね」

「わざと曖昧にしてんだよ。言うこと聞かなきゃ生きていけない、って強迫観念を植え付けてるんだ。教育って名の元に。でも実は、この重い玉って割と平坦な道を行くこともあって」
「山あり谷ありはあっても」
「そそ。むしろ車輪みたいに、押せばほとんど勝手に転がるもんなんだよ」
「WHEEL OF FORTUNE……運命の輪」
「おおどうしたの今日は山葉さん。美しいわよ」
「おほほ、今言ってちょっとキレイかな、って思った」

「才能あるよ、詩人の」
「そうかね」
「つまりまとめると、
『運命の輪は、愛で回せ』」
「うんうん、いいかんじ。この輪もぐるぐる回すんだけど、想像力も学習も芸術も、その中で回すんだよね」
「ああそうそう、フラクタル構造、かな」
「っていうか渾然一体っていうか」
「そっか、分けて考えると貧しくなるな。ていうか……」

「これ全部まとめて、『愛』？」
「想像力で相手のことを想い、学習で相手との関係を良くし、芸術で想いを伝え合う。愛以外の何物でもねーな。
運命の輪、その名は愛。そしてそれを回すのも愛」
「きっとこれを手に入れたからこそ、神様は人間を楽園から追い出したんだよ。『もうお外でも大丈夫』って。
愛が、すべてさ」
「ああもうぐうの音も出ない完璧なまとめだ」
「どやぁ。

ふふっ、二人で、二人で」
「おうそうだな。じゃ、せーの」
「「どやぁ」」
「ふふふ」
「わはは……自己増殖性にサイクル性。なーんだ愛なんて理屈は簡単なもんだな」
「実践が難しいんだって。でも、愛すればだいたい返ってくるよね」
「てか返ってこない奴からはすぐ離れろ。キリストじゃあるまいし、敵まで愛してる暇ありませんて。味方、好きな人きもちいい人、そして愛をくれる人」

「わたしは？」
「めっちゃ貰ってるよ。髪くくってくれるからな。ウチのネコどもなんかニャー言って転がるだけだ。むしろそのぐらいでもいーんだよ」
「じゃフィードバックに、つきあってもらおっかな」
「お、どこ行く」

知らぬ間に昼下がりになって、店内が混んでいた。
二人は席を立つ。
「北欧雑貨のお店ができたの。そこ行きたい」

「ああいいな。あ、俺ペットショップ寄っていい？」
「まだ飼うの!?」
「いやいや、エサなんか変わったの無いかなーって。ウチのアホどもよく喰うんだよ……」
「あっ、喰うで思い出した、今度駅前にできたホルモン屋さんに連れてってくれない？　女の子同士で入りにくくてー」
「ああほいほい。ランランとか？　じゃ川崎も誘うか」
「川崎君ダメだって。貪るから」
「あそーだな絶対割り勘負けするからな……ランも喰

うしなあ」
「じゃ二人でこっそり行こっか」
「そーすっか。てか夜行く？」
「えっ、そんな思い立ったが方式でいいのかな。今日すでに結構盛りだくさんなのに」
「好きなことだけ、好きなだけ。
すぐ死ぬぜ、俺達」
「……お母さんに連絡する」
「ういうい」
「ポンちゃんはマッマに言わなくていーの？」
「ウチは食い物はいつも何か放置してあるウチなんで

……」
「あれすごいよね、カレーソースがいつも煮立って
て」
「マイマザーの乙女のポリシーは『カレーさえあれば
カレーライスとカレーうどんとカレーパンとインディ
アンカレーがすぐできる』……肉喰お肉」
「腸とか胃とか尻尾とかですよ」
「おまホントに女か。ハラミぐらいあるだろー」
「さあ……」
「そんな本格派なの!?」
「さきペットショップ行こっか」

「この女は!!」
「あっちょっと待って、階が近いから言っただけ、階が近いから」
「ホントかー!?」
「あじゃあホルモン止めてケンタにする？」
「肉から離れろ」
「もめんどくさいなあ、じゃポンちゃんずっとビビンバクッパビビンバクッパで」
「喰うよ喰う」
「ツカサくん優柔不断で女の子みたい」
「この……あ俺ここで珈琲豆買うわ」

「あ、なんか良さげな食料品店」
「見てくか」
「うん」
ゆるゆると運命の輪を回す二人。

【感染】

「聞いたよぱるるん。うんうん、ついに収まるべきところに収まったというか……おばちゃん、嬉しい！」
「はあ。
……なにが」
「にゃにをトボケちゃって！　ポンちゃんとくっついたこと！」
「あああれね。
……ハア？」

「もぅいいからいいから。いまさら隠さなくっても」
「いやいや、いやいや」
「だってこないだ日曜映画観に行って二人でご飯食べて超デートでしょ？」
「そりゃ古馴染なんだからそのぐらいしますよ。デートとかじゃない」
「いやーサンドイッチ食べながら二人で一つのストローで回し飲み！　さらに夜は！　焼肉でニンニクで精力つけてつけてハッスルハッスル！　脂ぎったオッサンとトウの立ったキャバ嬢かおまいらは！」
パーン。

「いた……ちょっと話歪み過ぎ。誰その情報源」
「梶場っち。たまたま見かけたって」
「あの子一〇言葉吐くと一二東スポでしょ!?　なに焼肉まで尾行して来たの!?」
「暇だったからって。なんかパルちゃん超可愛い髪型してて二人ともニヘニヘ超笑ってるからこりゃ面白いってんで」
「プロの野次馬か……ちょっと待ってそれは誤解」
「じゃなに行ってないの映画」
「行った」
「サンドイッチ食べてないの」

「食べた」
「焼肉は」
「……行った」
「なんか横ペッターくっついて食べさせ合いしてたとか」
「狭いカウンター席だから。生センマイ気持ち悪いっていうから無理に食べさせたら報復でプチトマトねじ込まれた」
「デートどころかセックスだそれ」
「ファ!?　いやデートとかじゃホントに無いから。ホントにそれは。ツカサの名誉のためにも」

「わ。もう『ポンちゃん』じゃなくて名前呼び捨て！名前呼び捨て！」
「や、待ってってば、今のは勢いで」
「無意識！　無意識最強そして最高！　それこそ真っ赤な炭火の遠赤外線を浴びながら金網の上に踊る焼肉・ラヴ！
『ほら……僕のギアラをお食べ』
『わたしもう、トントロ』
オモニ！　いいから冷麺作り始めて！」
「ラン、大丈夫？」
「えーんじゃなんだっつーんだよー愛の交歓ラヴ・ア

フェアー以外のなんだっつーんだよー」
「いや、えーっ……と」
「ほら答えらんない、ラヴ&ピースじゃん」
「や。んー……
それはね」

「……本田。おめでとう」
「ありがとう。
なにが」
「ま、お前も黙ってりゃモテるのにあーでもないこー

でもないと余計なことばっかり言ってわざと女子どもを近寄りがたくしてたの、あれなんでなんだ？と思ってたらやっぱりそういうことか」
「はあ。
なにが」
「結婚式には呼んでくれよ。じゃあな」
「待て、いつにもましてお前の言うことがよくわからん。なんだ、いったい」
「春ちゃんと結婚すんだろ？」
「は？　誰が」
「おまえが」

「ちょっと待てって朝からドッと疲れたなんだそれ。誰がそんなデマにもならんデマ流してんだ。そんなもんありえねーって見りゃわかっだろプーチンが実は女だったって言われるよりありえねー」
「照れんなって。俺にはお前ら二人がくっつく方がビン・ラディンが実は死んでないと言われるよりも意外性が無い」
「えーと……いやどっちがどうとかどうでもいいんだ。誰だそんな嘘並べて売ってるヤクザ露天商」
「鈴木が言ってんやから間違いないだろ」
「一番間違えてそうなヤツだろ。なんでランそんない

いかげんなこと」
「なんかお前ら二人がショッピングモールでイチャイチャモチャモチャしてるところを誰かが見てたのを聞いたらしい。ありえないほどチアワセソウーな顔でお互いの頭ナデナデーを延々繰り返していたとか……フアックユーアスホール」
「いや待て待て、それは野球の守備練習を田んぼの草引きと誤解するほどの大いなる誤解だ。映画観に行って、飯食って、のんびりしてただけだって」
「いちゃいちゃじゃねいか」
「お前と俺とで映画行って飯食ってダベってたらそん

な風に言うか!?」
「鈴木が見たらそう思うかもな」
「腐女子脳だからなヤツは……いや！　だったらそうじゃないだろ!?」
「俺的にはそういうことはどうでもいいんだよ。俺はいつまでも煮え切らなかったお前ら二人がやっとくっついて安心した。ただそれだけのことなんだ」
「いやだーかーらー」
「じゃ何してたんだデートじゃないとしたらそんなところで二人っきりで一体何を。説明してみ？」
「いや、んー……

それは、だな」

「あ、川崎くーん」
「鈴木。なんか様子が変だぞ」
「あれ、ポンちゃんも？　ぱるるんもだった。これはあれだね、確実にラヴ・ディシーズそう病オブ恋」
「てことはやっぱり本当なのかなあ。いやいや本当の方が友人としては喜ばしきことなんだが」
「うんうん、そーだね。だってさ、それ以外考えらんないよ、すっごいこと言ってたよ春ちゃん」

「おうポンちゃんもだよ。ま奴はいつも変なこと言ってんだけど、今日はとびきり変だった」
「ホントに？　だってさ、二人でね、ぷぷ、
『運命の輪を回してた』
だって！」
「うわ洒落になってねー……本田も全く同じ。
『運命の輪を回してた』
って」
「マアジイ!?　ヤッバー!!」
「頭ン中完全にお花畑じゃねいか……でもちょっと、羨ましい」

「ああコワイコワイ。あのクールビューリィーとワールドナナメウォッチャーがそんな浮っついたキラキラセリフをハモンズするなんてネヴァー・シンジランナーイ！」
「恋は人間を変えちゃうものさ……鈴木さんも、いいひと見つけなさいよ」
「川崎くんもね。はぁ……『運命の輪』かぁ……Wheel of Fortune ですよ。大アルカナ No.10」
「いいなあ」
「いいねえ。
じゃなくて、だからその輪、自分で回さなくちゃダ

メなんだよゼッツー」
「ランもな」
天は自ら助くる者を助く。

■参考文献

安冨歩『超訳　論語』

■おくづけ

『運命の輪』

作者　ながたかずひさ

発行日　2013.3.17

mail　nagata@mti.biglobe.ne.jp

web　http://rakken.net/
twitterID　KazuhisaNagata

Wheel of Fortune
Powered by Kazuhisa Nagata